

大学生のひきこもり親和性に自己受容・他者受容および 社会的信頼が及ぼす影響

竹元 雅也*

Influence of Self-acceptance, Acceptance of Others, and Social Trust on Affinity for Shutting-in among University Students

Masaya TAKEMOTO*

Support for university students not attending classes or shutting-in themselves has become an important issue for universities. In this study, a questionnaire survey was conducted to 384 students to obtain knowledge on such support. The study includes affinity for shutting-in, influence from self-acceptance, acceptance of others and social trust, and also “fear of intimacy” which assumed to be a specific interpersonal relationship with the affinity. In multiple regression analysis, “self-acceptance” and “social trust” indicated significant influence on “affinity for shutting-in” for men and women. “Intimacy avoidance,” a sub-factor of “fear of intimacy,” was indicated likewise in “self-acceptance” for men and “self-acceptance,” “acceptance of others” and “social trust” for women. “Relationship dysregulation” significantly influenced “self-acceptance” and “acceptance of others” for men and women. Different factors influenced “affinity for shutting-in” as well as “intimacy avoidance” and “relationship dysregulation,” sub-factors of “fear of intimacy” which is considered to be a characteristics of interpersonal relationships thereof. To provide support in practice, it is considered necessary to identify where the difficulty lies before considering how to get involved.

key words: social withdrawal, self-acceptance, acceptance of others, social trust

問題と目的

近年、ひきこもり状態にある青年の存在が着目され、さまざまな機関で、さまざまな支援がなされている。厚生労働省(2010)によれば、ひきこもり状態にある者には、さまざまな背景があるとされている。①精神障害などが主診断となり医療的な支援が必要とされるもの、②発達障害や知的障害が主な背景に存在するもの、③パーソナリティ障害や同一性(アイデ

ンティティ)の問題などを主診断とする群の3つの群に分類されている。このうちいわゆる「社会的ひきこもり」(斎藤, 1998)を指す③の群に関しては、心理療法やカウンセリング、生活・就労支援などの心理・社会的な支援が中心となるとされている。いずれにしても、ひきこもり状態にある者については、何らかの対人関係の課題を抱えていることが特徴とされ、「対人関係開始の困難」や「対人関係継続の困難」(蔵本, 2008)等が指摘されている。

* 首都大学東京大学院人文科学研究科

Graduate School of Humanities, Tokyo Metropolitan University, 1-1 Minami-Osawa, Hachioji-shi, Tokyo 192-0397, Japan.

③の群にて指摘される同一性(アイデンティティ)の問題とは、青年期における発達課題 (Erikson, 1959)とされている。近年は、アイデンティティを関係性から捉えるパラダイムが提唱されている(杉村, 1998)。こうした流れの中で、アイデンティティは、他者の期待や欲求、関心を考慮する一方で、自己の欲求や関心を認識したり表現したりし、そこで生じた自己と他者の間の不一致を、相互調整によって解決する作業を通して形成されると捉えられるようになってきた(杉村, 1998, 2005)。そのため、アイデンティティ形成を考える上で、他者との関係性は不可分な問題として考えられるようになってきている。花嶋(2011)は、ひきこもり状態にある者が社会参加を果たす要因の1つとして、自分自身の「変えられない部分に折り合いが見つかる」ことが重要と述べている。これは自分自身の中での整理が重要であり、自分自身を受け入れていく自己受容のプロセスが重要であることが推察される。またひきこもり当事者は、対人関係の課題を抱えている者も多く、そうした当事者にとって、対人交流が持てるように、段階的に居場所等の集団支援がなされることがある。近藤(2013)は、自閉傾向の強いひきこもり青年に対して、他者の視点に気づけるように促すことが大切であることを述べている。さらに近藤(2013)は、他者の中において、アイデンティティを確立することの重要性を重ねて述べている。そのため、他者の存在をどのように受け入れていくかという点は重要であると考えられる。そのため、ひきこもり状態にある者や後述するひきこもりに対する親和性を持つ者にとっては、自分自身を受け入れていく自己受容や、他者の存在を受け入れていく他者受容が対人関係や社会適応における1つの重要なテーマになると考えられる。

自己受容とは、「ありのままの自己を受け容れる」(沢崎, 1994)こととされ、良好な対人関係の構築に寄与するもの(上村, 2007)とされている。Rogers(1949)は、心理療法の過程で、クライアント自身が自己受容的になり、それに伴い他者にも受容的になることを述べている。しかし、きわめて高い自己受容にある者は、必ずしも他者受容が高いわけではなく良好な対人関係を取ることができない(板津, 1994)とも指摘されてきた。上村(2007)は、自己受容と他者受容の得点の高低により4つの群に分類し、それぞれの群の個人的志向性と社会的志向性との関連性

を検討している。自己受容が高いものの他者受容が低い群は、他者への共存を志向する社会的志向性が弱いことが示されているとともに、反対に自己受容が低く、他者受容が高い群においては、自己実現的特性が低く、一方的な依存や過剰適応的な傾向を指摘している。自己受容と他者受容のどちらも低い群においては、最も不適応的で未熟な特徴を示していた。その結果から、自己受容と他者受容がバランスよく共存していることが、適応的かつ成熟した状態にあることが示された。これらの点は、対人交流開始や対人交流継続といった対人関係の諸側面において困難さを抱えているひきこもり当事者にも関連していることも推察される。そのため、ひきこもり傾向と自己受容・他者受容の関連について検討することで、支援に向けた知見を得られると考えられる。

ところで、同一性(アイデンティティ)という概念は、人間が社会への適応のための機能の総体(宮下, 2014)という意味を包含しているとされ、青年期において、社会とどのように関わるかという課題も関連していると考えられる。ひきこもり状態に至るきっかけについて、内閣府政策統括官(2010)の調査によると、「職場になじめなかった」23.7%、「就職活動がうまくいかなかった」が20.3%と、半数近くが学校から社会生活に移行するプロセスにおいてのつまずきである点が報告されている。このプロセスの困難さについても、実態を明らかにし、ひきこもり状態を未然に防ぐ働きかけを行う取組みを視野に入れる必要がある。白井・安達・若松・下村・川崎(2009)では、文章完成法にて社会的信頼の質と、社会移行の質の関連を調査した。その結果、高い社会的信頼を持つ者は、社会への移行を促進する効果があることを指摘している。社会的信頼とは、市民あるいは人間にとって社会が公正であり援助的であり信頼に足るものであるとみなす信念をいう(Flanagan, 2004; Putnum, 2006)。ひきこもり状態やひきこもり傾向にある者について社会的信頼のあり方を検討することも、支援に向けた知見を得られる可能性がある。

ところで、ひきこもりに関連する概念として、ひきこもり親和群に関する研究も積み重ねられている。ひきこもり親和群とは、「実際にはひきこもっていないにも関わらず、ひきこもる人の気持ちがわかるとか、自分でもひきこもりたいと思う人々」(内閣府政策統括官, 2010)とされており、ひきこもり親和性は

この傾向を表す用語である。ひきこもり親和群は、将来ひきこもりに移行する可能性がある予備軍的な存在であることが指摘されている。渡部・松井・高塚(2010)が指摘するように、実際にひきこもっている群だけではなく、ひきこもりへの親和性を示す群に対するケアにも充実化し、ひきこもりに至る前段階で介入する方法を検討することが必要であると考えられる。

さらに、本研究では、ひきこもり親和群の中でも、大学生における時期に着目した。大学生は、先述した就職活動等のプロセスを経て、学校生活から社会生活の移行に直面する時期であるといえる。社会移行を見据えて大学等の高等教育機関において、学生に対して成長促進的に介入する必要性も考えられる。また、大学生生活自体の不応にひきこもり・不登校も着目されている。大久保(2005)は、高校以前の適応感も大きく影響していることを指摘しており、中学・高校時代の思春期の課題が持ち越され、大学において対人関係が築けないことが不応に影響していることも推察される。そうした不応傾向にある学生に対して、早期の介入等の有用性を示唆する知見も報告(松本, 2004; 大石, 2004 等)されている。その一方で、マンパワーの問題による対応の限界(水田・石谷・安住, 2011)や、困り感を抱えているにも関わらず、相談室に来談しない学生(最上・金子・佐藤・布施・市来, 2008)も指摘されている。ゼミの指導教員等の大学の教職員が対応に追われる場合等のケースもあり、大学としては、検討すべき重要な課題の1つとなっている。そのため、ひきこもり状態に至ることを予防するという視点からも、大学等の高等教育機関における早期のよりよい介入に向けた基礎的な資料を収集し、知見の蓄積を図ることも重要と考えられる。

以上より、本研究では、ひきこもり親和性と自己受容および他者受容、社会的信頼の間にどのような関連が見出されるか検討する。またひきこもり者の特徴とは、対人関係から退却すること(鍋田, 2001)や、対人関係継続の困難さ(蔵本, 2008)であるとされている。そのため今回は、ひきこもり親和性のある大学生における具体的な対人関係の特徴と想定される、ふれ合い恐怖心性についても同時に検討する。ふれ合い恐怖心性とは、対人恐怖の1つの型として、山田・安藤・宮川・奥田(1987)や、山田(1989)が指

摘しているものである。形式的・機械的な関係や、情緒的な深まりの無い場面は問題なくこなせるが、対人関係が深まる場面において困難を感じるという対人恐怖(岡田, 2002)である。さらに岡田(2002)は、従来型の対人恐怖よりも未熟な発達段階にとどまっていること、極端なふれ合い恐怖心性の現れ方を示す者と社会的ひきこもりとの関連を示唆している。ひきこもり親和性を持つ大学生の具体的な対人関係の特徴として考えられるふれ合い恐怖心性についても同時に測定し、各尺度と検討する。これらを検討することで、ひきこもりたいという気持ちであるひきこもり親和性を持つ大学生や、ひきこもりの原因となる対人関係の不応に対して、教育機関である大学や非臨床的な場における、ひきこもりに至る前段階で介入する方法についての有益な示唆が得られると考えられる。

方 法

本研究では、質問紙調査を行った。

調査協力者

アイブリッジ株式会社の調査モニターとして、登録している日本全国の大学生400名(男性200名; 女性200名)を対象に調査を行った。そのうち、欠損値がない有効回答であった、384名(男性186名; 女性198名)を分析対象とした。年齢の対象は18歳~24歳(平均19.78歳, 標準偏差=1.83)であった。

調査手続き

本調査は、2020年12月28日から12月29日にかけて、アイブリッジ株式会社のWebアンケートにて実施された。調査の実施にあたって、筆者の所属機関における研究倫理審査委員会の承認を経た(承認番号26-36)。手続きについては、アイブリッジ株式会社の倫理規定に従った。アンケート配布の際には、調査の趣旨の説明と調査協力の依頼に合わせて、倫理的配慮として、調査への参加は自由であること、回答は匿名で行うこと、プライバシーは保護されることをフェイスシートに明記した。

調査材料

ひきこもり親和性 ひきこもり親和性を評価する尺度として、ひきこもりへの志向性や理解を示す傾向を測定する質問項目(東京都青少年・治安対策本部, 2008)を使用した。ひきこもり親和性を尋ねる4項目(「家や自室に閉じこもっていて外に出たくない

い人の気持ちがわかる」、「自分も、家や自室に閉じこもりたいと思うことがある」、「嫌な出来事があると外に出たくなくなる」、「理由があれば家や自室に閉じこもるのも仕方ないと思う」の合計点をひきこもり親和性得点とする。評定は、「いいえ(1点)~はい(4点)」の4件法で、可能な得点範囲は4~16点である。この尺度は渡部・松井・高塚(2010)によって、信頼性の確認が行われている。

自己受容・他者受容尺度 自己受容・他者受容を評価する尺度として、上村(2007)で用いた尺度を使用した。本尺度は、Berger(1952)のAcceptance of Self and Others Scaleをもとに、吉田・澤野・服部(1992)が作成した尺度を上村(2007)が尺度構成を検討し直したものである。自己受容尺度15項目(「誰といてもどんな時にも、劣等感に悩まされる」など)、他者受容尺度13項目(「他人と言い争いになると、その人にいらいらしやすい」)から構成されている。評定は、「全くあてはまる(7点)」から「全くあてはまらない(1点)」までの7件法である。上村(2007)によって、信頼性が確認されている。

社会的信頼に関する尺度 社会的信頼を評価する尺度として、白井ら(2009)の研究で用いられた1項目「私にとって社会は」という文章を完成させるよう求めた。評定基準も白井ら(2009)のものに準じた。社会に対して否定的だったり、無関心だったりする場合を「否定」(1点と得点化)、否定ではないが肯定とも言えない場合や、否定・肯定の拮抗が示される場合を「中位」(2点)、社会に対する積極的なかわりや自分を支えてくれる基盤としての社会が明確に示される場合を「肯定」(3点)とした。主な記述例として、「否定」は、「怖いもの」「厳しい」など、「中位」は、「普通の存在」「仕事」など、「肯定」は、「大切」「自分が輝ける場所」などである。評定の妥当性を検討するために、研究の目的を知らない大学院生1名との評定の一致率を計算した結果、85%と十分な値を得た。評定が一致しなかった回答については、2名で検討の上、決定した。

ふれ合い恐怖心性尺度 岡田(2002)の「ふれ合い恐怖尺度」を用いた。「対人退却」(「できれば人とあまり関わりたいたくない」など)因子10項目、「関係調整不全」(「他人とちょうどよい距離をとるのが難しい」など)因子7項目の全17項目から構成されている。「とてもあてはまる(6点)」から「まったくあ

てはまらない(1点)」の6件法である。岡田(2002)によって、妥当性と信頼性が検証されている。

サンプルの代表性の検討 本調査は、調査会社のモニターを用いたインターネット調査であったため、調査回答者の属性に若干の歪みがある可能性がある。そこで、今回の調査回答者の特徴を検討する目的で、同じく大学生を対象としたひきこもり親和性尺度の得点を用いた新井・弘中・近藤(2015)の報告(男性：平均値=11.68, 標準偏差=2.89, 女性：平均値=12.72, 標準偏差=2.69)、下野・長谷川・土原・国里(2020)の報告(全体平均値=11.91, 標準偏差=2.70)における、平均点や標準偏差と比較検討した。その結果、多少の歪みは見られたものの、概ね近似した値を示していることが確認され、本研究のサンプルの代表性に著しい偏りがないと考えられた。

統計解析 統計解析には、Kanda(2013)のEZRを使用した。

結 果

第1に、各尺度について信頼性分析を行った。第2に、本研究で用いた各変数の記述統計量を算出した。第3に、ひきこもり親和性尺度および、ふれ合い恐怖尺度の下位因子2項目をそれぞれ目的変数とし、自己受容、他者受容および社会的信頼を説明変数とした重回帰分析を行った。

信頼性係数

各尺度における α 係数を算出した。 α 係数は.70を基準とした。ふれ合い恐怖尺度は、(対人退却因子 $\alpha=.86$, 関係調整不全 $\alpha=.83$)高い信頼性が確認された。ひきこもり親和性尺度は $\alpha=.77$ と、おおむね十分な信頼性が確認された。一方、自己受容・他者受容尺度については、自己受容尺度は $\alpha=.76$ とおおむね十分な値であったが、他者受容尺度は $\alpha=.69$ とやや不十分な値であった。修正済み項目合計相関を見ると、 $r=.30$ 以下の項目が見られた。その項目を削除した方が、信頼性係数が上昇(自己受容尺度は $\alpha=.84$, 他者受容尺度は $\alpha=.81$)していた。そのため、これ以降の分析は、当該項目を削除した尺度(自己受容尺度9項目, 他者受容尺度8項目)で分析を行った。以下、Table 1 および Table 2 に、自己受容尺度・他者受容尺度の α 係数、修正済み項目合計相関(IT相関)、各項目が削除された場合の α 係数を示す。

Table 1 自己受容尺度の構成

項目	IT 相関 ($\alpha = .84$)	項目削除後 α 係数
誰といってもどんな時にも、よく劣等感に悩まされる。	0.64	0.815
どんな時でもどんな人といっても、なんだか自分自身について半信半疑である。	0.66	0.812
大勢の人たちの中では間違っただけを言うのを恐れるので、たいていあまり話さない。	0.56	0.823
生活の中である人たちについて色々な感じ方を持つことがあるが、その人たちに対して悪いなという気がしてならない。	0.45	0.835
親しい他人の意見が正しくないと思う時でも、その人との関係をまずくしたくないので反論を控える。	0.50	0.829
親の考え方に同意できなくても安心させたいので、親の考え方に沿うような生き方をする。	0.43	0.836
大勢の人の前ではとても内気になるので、自意識過剰になってしまう。	0.59	0.820
あまり自分を普通だと思えないので、自分を普通だと感じたい。	0.56	0.823
家族に自分のしていることが認められないと、安心してそれに組み込まなくなる。	0.58	0.821

Table 2 他者受容尺度の構成

項目	IT 相関 ($\alpha = .81$)	項目削除後 α 係数
他人が後で何か良いことをしてくれるのでなければ、他人のために何かすることにはあまり利点があるとは思わない。	0.45	0.795
人生において自分の望むことを得るのに助けになるなら、少しぐらいほかの人の感情を害してもよいと思う。	0.56	0.779
他人と言い争いになると、その人に対していらいらしやうい。	0.41	0.800
家族に自分の判断で決めたことを批判されると、いらいらして自分の意見ばかり言い張る。	0.48	0.790
親しい他人に自分の意見を批判されると、その人の意見には耳もかかず自分の意見ばかり押し通す。	0.59	0.775
何か自分の重要な目的を成し遂げようとしている時、ほかの人の感情をたいてい無視する。	0.55	0.780
自分に対して何か批判があったり、誰かが何かを言ったりすると、それを受け入れることができない。	0.57	0.777
親の考え方は気に入らないので、一方的に非難したり反発したりする。	0.55	0.781

Table 3 各尺度の合計得点の平均および標準偏差

	男子	女子	全体	t 値
	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)	
ひきこもり親和性	10.75 (2.86)	11.51 (2.82)	11.15 (2.86)	2.60***
自己受容	36.88 (9.87)	35.66 (8.71)	36.25 (9.30)	1.29
他者受容	33.38 (8.07)	34.88 (6.89)	34.15 (7.51)	1.96
社会的信頼	1.66 (0.70)	1.69 (0.69)	1.67 (0.68)	0.35
対人退却	34.61 (8.96)	33.62 (9.94)	34.10 (9.46)	1.03
関係調整不全	24.60 (6.73)	24.10 (6.83)	24.34 (6.78)	0.72

*** $p < .001$

記述統計量

各尺度における男女別および全体の各尺度の合計得点の平均値、標準偏差を Table 3 に示した。また、男女間において、各尺度の得点を t 検定によって比較した。その結果、ひきこもり親和性については、女性の方が有意に高かった。その他の尺度の得点にお

いては、男女間で有意な差は見られなかった。

重回帰分析

男女別に、「ひきこもり親和性」「対人退却」「関係調整不全」を目的変数とし、それぞれ「自己受容」「他者受容」「社会的信頼」の3つを説明変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った。男性の結果を Table

Table 4 男性の重回帰分析結果

	標準化偏回帰係数 (β)			調整済み 決定係数 (R^2)
	自己受容	他者受容	社会的信頼	
ひきこもり親和性	-.49 ***	-.04	-.18 **	.31 ***
対人退却	-.41 ***	-.04	-.08	.19 ***
関係調整不全	-.54 ***	-.24 ***	-.09	.52 ***

** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 5 女性の重回帰分析の結果

	標準化偏回帰係数 (β)			調整済み 決定係数 (R^2)
	自己受容	他者受容	社会的信頼	
ひきこもり親和性	-.35 ***	-.12	-.29 ***	.28 ***
対人退却	-.39 ***	-.21 ***	-.27 ***	.38 ***
関係調整不全	-.54 ***	-.24 ***	-.09	.50 ***

*** $p < .001$

4に、女性の結果をTable 5に示す。

はじめに、男性の結果について述べる。「ひきこもり親和性」については、「自己受容」と「社会的信頼」について、有意な影響が見られた。一方で、「他者受容」については有意な影響が見られなかった。続いて、「ふれ合い恐怖心性」の下位因子である「対人退却」および「関係調整不全」において述べる。まず「対人退却」について、「自己受容」のみ有意な影響が見られた。「関係調整不全」においては、「自己受容」および「他者受容」について有意な影響が示された。

次に女性の結果について述べる。「ひきこもり親和性」については、男性と同様に「自己受容」と「社会的信頼」について、有意な影響が見られた。一方で、「ひきこもり親和性」と「他者受容」について有意な影響が見られなかった。「ふれ合い恐怖」の下位因子について女性では、「対人退却」には、「自己受容」「他者受容」「社会的信頼」のすべての項目の影響が示唆された。「関係調整不全」については、「自己受容」および「他者受容」については、有意な影響が示された。

考 察

男女別の平均点においては、「ひきこもり親和性」と得点が、男性より女性の方が有意に高かった。渡部・松井・高塚(2010)の、ひきこもりに対する親和的な感情を抱えながらも、実際のひきこもり行動には至らない「ひきこもり親和群」には女性が多いという調査結果とも関連する。

そして、「ひきこもり親和性」や「ふれ合い恐怖」の2つの下位因子(「対人退却」「関係調整不全」)を目的変数とした重回帰分析について述べる。男性・女性ともに、「ひきこもり親和性」については、「自己受容」と「社会的信頼」が高まることで「ひきこもり親和性」の低減に影響していることが示唆される。一方で、過剰に自己受容が高い状態にある者は、必ずしも良好な対人関係を取ることができない(板津, 1994)とされている。しかし、「ひきこもり親和性」は、あくまでひきこもりたい気持ちについての主観的な感覚であり、具体的な対人関係場面を想定するものではない。そのため、自己受容が高い状態にあることが、ひきこもり親和性の低減に影響する結果になったことが推察された。そして、社会的信頼とは、社会が公正的であり、信頼に足るものであるとみなす信念である。一般化した社会への信頼について測定しているものである。一般大学生においては、「社会的信頼」が高まることで、ひきこもり親和性を低減させる影響を与えていることが推察された。これは、白井ら(2009)の社会的移行を促すとされる、先行研究の知見とも重なる。

続いて「ふれあい恐怖」の2つの下位因子「対人退却」「関係調整不全」について述べる。まず「対人退却」について、男性は、「自己受容」に有意な影響が示された。女性については、「自己受容」「他者受容」「社会的信頼」と、すべての項目との有意な影響が示された。「関係調整不全」については、男女ともに「自己

受容「他者受容」との有意な影響が示された。

「対人退却」とは、他者と関係そのものを持つとうとする行動に対する感じ方を測定している。岡田(2002)は、対人退却の背景には、自分が傷つくことへの防衛が働いている可能性を指摘している。実際に対人関係を持つことは、自己受容の低さに直面せざるを得ない状況に出会うことも想定される。一方、女性は、「対人退却」について、「自己受容」に加え、「他者受容」や「社会的信頼」の影響が示された。このことは、アイデンティティ形成のプロセスにおいて、男性は他者との競争、女性は愛着と親和といった重要視する側面が異なる(Thorbecke & Grotevant, 1982)ことも関連すると考えられる。女性は、他者や社会や周囲の関係性との向き合い方が男性よりも大きな比重を持っており、対人関係を持つとうすることに影響を与えているのではないかと推察される。

そして、「関係調整不全」とは、対人関係が深まったのちに生じるであろう困難を測定している。「関係調整不全」は、男女ともに「自己受容」と「他者受容」の有意な影響が示された。上村(2007)は、「自己受容」と「他者受容」のどちらもバランスが取れていることが、適応的で成熟した対人関係を取ることができると指摘している。上村(2007)の知見を支持するように、大学生においては、「自己受容」「他者受容」がどちらも高い状態にあることが、対人関係を維持するにあたって影響を与えていることが示唆される。

本研究のまとめと今後の課題

本研究では、ひきこもりに近い心性であるとされる「ひきこもり親和性」や、ひきこもり親和性の高い大学生の具体的な対人関係のあり方と想定される「ふれ合い恐怖」と、「自己受容」「他者受容」「社会的信頼」がもたらす影響の大きさについて検討した。その結果、「ひきこもり親和性」には、男女ともに「自己受容」と「社会的信頼」が有意に影響していることが示された。「ふれ合い恐怖」の下位因子「対人退却」には、男性は「対人退却」、女性は「自己受容」「他者受容」「社会的信頼」のすべてに有意な影響が示された。「ふれ合い恐怖」のもう1つの下位因子「関係調整不全」には、男女とも「自己受容」「他者受容」について、有意な影響が示された。大学生に対するひきこもりの予防には、これらの要因を高める働きかけが効果的である可能性が示唆される。

そして、ひきこもり親和性に関連する対人関係と想定した「ふれ合い恐怖」の各下位因子「対人退却」「関係調整不全」は、それぞれ異なる要因が影響していることが示唆された。蔵本(2008)は、ひきこもり当事者の持つ対人関係の困難さの質について見極めることの重要性を述べている。本研究においても、そもそも対人関係を持つとうすることを避けようとする「対人退却」と、対人関係が深まることを避けようとする「関係調整不全」では、異なる要因が影響を与えていることが示された。つまり、どちらに対人関係の困難があるかによって、支援方法が異なることが示唆される。この点は、実際に学生支援を行うにあたって留意すべき重要な点であると考えられる。

そして、「ひきこもりたい気持ち」である「ひきこもり親和性」には、「自己受容」「社会的信頼」が影響しており、こちらも「ふれ合い恐怖」と異なる要因の影響が示された。確かに、ひきこもりの青年の中には周囲から見ると、ある日突然にひきこもるケース(鍋田, 2001)も存在する。表面的な対人関係が一見良好であったとしても、心のうちでは、自分自身を肯定できず、社会が信頼に値するものと思えずにいるなどの内的な問題を抱えており、潜在的にひきこもり状態になる可能性を秘めていることも考えられる。一見問題が顕在化しない学生や、学生相談室に来談しないなど援助行動を求めない学生に対しても、自己受容や社会的信頼を高める働きかけを行うことで、支援を行える可能性が示唆される。

本研究では、どのようにして自己受容や他者受容および社会的信頼の感覚を持てるようになるかのプロセスや、質的なあり方の差異について検討することができなかった。ひきこもり青年は、「きわめて主観的な世界に生きている」「理想のあり方にこだわり続ける」(高塚, 2008)点や、「一方的に他者に配慮するが、実際は他者を見ていない」(鍋田, 2001)などの特徴が指摘されている。例えば自己受容の感覚の持ち方も、ひきこもり親和性の高い者とそうでない者のあり方には何らかの質的な違いがあるかもしれない。これらについて追跡的な検討を行うことで、ひきこもり親和性の高い者の特徴をさらに明らかにできる可能性がある。さらに、今回は一般大学生を対象に「ひきこもり親和性」について検討したが、実際のひきこもり群も含めて検討すると、より知見が深まる可能性も考えられる。

引用文献

- 新井博達・弘中由麻・近藤清美 (2015). 社交不安症状と対人的自己効力感が大学生のひきこもり親和性に与える影響 パーソナリティ研究, **24**(1), 1-14.
- Berger, E. M. (1952). The relation between expressed acceptance of self and expressed acceptance of others. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **47**, 778-782.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the Life Cycle*. International Universities Press. (E.H.エリクソン 西平直・中島由恵 (訳) (2011) アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Flanagan, C. A. (2004). Volunteerism, leadership, political, socialization, and civic engagement. In Lerner, R. M., & Steinberg, L. (Eds.), *Handbook Of adolescent psychology*. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons, pp. 721-745.
- 花嶋裕久 (2011). ひきこもりの若者の居場所と就労に関する研究—居場所から社会に出るまでのプロセス— 心理臨床学研究, **29**(5), 610-621.
- 板津裕己 (1994). 自己受容性と対人態度との関わりについて 教育心理学研究, **42**, 86-94.
- Kanda, Y. (2013). Investigation of the freely available easy-to-use software 'EZ' for medical statistics. *Bone Marrow Transplantation*, **48**, 452-458.
- 近藤直司 (2013). 社会的ひきこもりと自閉症スペクトラム障害 自閉症スペクトラム研究, **10**, 37-45.
- 厚生労働省 (2010). ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン.
- 蔵本信比古 (2008). 社会的ひきこもりに関与する心理的特性の検討 心理臨床学研究, **26**(3), 314-324.
- 草野智洋 (2012). 大学生におけるひきこもり傾向と人生の意味・目的意識との関連 カウンセリング研究, **45**, 11-19.
- 松本 剛 (2004). 「大学生のひきこもり」への人間性心理学的アプローチの有効性 学生相談研究, **25**, 137-147.
- 宮下一博 (2014). アイデンティティの必要性 宮下一博・谷 冬彦・大倉得史 (編) 鐘幹八郎 (監修) アイデンティティ研究ハンドブック ナカニシヤ出版 pp. 1-8.
- 水田一郎・石谷真一・安住伸子 (2011). 大学における不登校・ひきこもりに対する支援の実態と今後の課題—学生相談機関対象の実態調査から— 学生相談研究, **32**, 23-35.
- 最上澄枝・金子糸子・佐藤哲康・布施晶子・市来真彦 (2008). 自ら助けを求めず潜在している学生に対する学内協働による取り組み—欠席過多学生対応プロジェクトを通して— 学生相談研究, **28**, 214-224.
- 鍋田恭孝 (2001). ひきこもりの心理 教職研修, 7月増刊, 170-182.
- 内閣府政策統括官 (2010). 若者の意識に関する調査 (ひきこもりに関する実態調査) 報告書.
- 岡田 努 (2002). 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察 性格心理学研究, **10**(2), 69-84.
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, **53**(3), 307-319.
- 大石英史 (2004). ひきこもり初期への介入によってキャンパス復帰を果たした女子学生の事例 学生相談研究, **25**, 11-20.
- Putnam, R. D., 柴内康文 (訳) (2006). 孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生 東京: 柏書房 (Putnam, R. D. (2000). *Bowling alone: The collapse and revival of American community*, New York: Simon & Schuster.)
- Rogers, C. R. (1949). A coordinated research in psychotherapy: A nonobjective introduction. *Journal of Consulting Psychology*, **13**, 149-153.
- 斎藤 環 (1998). 社会的ひきこもり—終わらない思春期— PHP 新書.
- 沢崎達夫 (1994). 自己受容に関する研究 (2): 男女大学生における自己受容の様相を中心として カウンセリング研究, **27**, 46-52.
- 下野有紀・長谷川晃・土原浩平・国里愛彦 (2020). 大学生用ひきこもり親和性尺度の作成 感情心理学研究, **27**(2), 51-60.
- 白井利明・安達智子・若松養亮・下村英雄・川崎友嗣 (2009). 青年期から成人期にかけての社会への移行における社会的信頼の効果: シティズンシップの観点から 発達心理学研究, **20**(3), 224-233.
- 杉村和美 (1998). 「青年期におけるアイデンティティの形成: 関係性の観点からのとらえ直し」 発達心理学研究, **9**(1), 45-55.
- 杉村和美 (2005). 関係性の観点から見たアイデンティティ形成における移行の問題 梶田淑一 (編) 自己意識研究の現在 2 京都: ナカニシヤ出版 pp. 77-100.
- 高塚雄介 (2008). ひきこもりの実態ならびに今後必要な方策は何か—東京都若者自立支援調査・研究から見てきたもの— こころの健康, **23**(2), 42-48.
- Thorbecke, W., & Grotevant, H. D. (1982). Gender differences in adolescent interpersonal identity formation. *Journal of Youth and Adolescence*, **11**, 479-492.
- 東京都青少年・治安対策本部 (2008). 実態調査からみるひきこもる若者のこころ 平成19年度若年者自立支援調査研究報告書 東京都青少年・治安対策

本部総合対策本部若年者課

- 上村有平 (2007). 青年期後期における自己受容と他者受容の関連：個人志向性・社会指向性を指標として 発達心理学研究, **18**(2), 132-138.
- 渡部麻美・松井 豊・高塚雄介 (2010). ひきこもりおよびひきこもり親和性を規定する要因の検討 心理学研究, **81**, 478-484.
- 山田和夫 (1989). 境界例の周辺：サブクリニカルな問題性格群 季刊精神療法, **15**, 350-360.
- 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子 (1987). 問題のある未熟な学生の親子関係からの研究 (第2報)：ふれ合い恐怖 (会食恐怖) の本質と家族研究 安田生命社会事業団研究助成論文集, **23**(2), 206-215.
- 吉田昭久・澤野有香・服部 智 (1992). 自己受容の基底因：Berger's scale の再検討 茨城大学紀要, **41**, 289-308.

(受稿: 2021.4.20; 受理: 2021.9.21)
